

「某氏からデカルトへの書簡 (1641年7月)」 訳解

A Letter from X to Descartes, July 1641

山田 弘明
Hiroaki YAMADA

「某氏からデカルトへ パリ1641年7月」という差出人不明のラテン語書簡が存在する。長文であり、その内容はデカルトの「第五答弁」に対してガッサンディ主義の立場から細かな点を再反論する、という重いものとなっている。当初、デカルトはこれに答弁を付して『省察』の「反論と答弁」の最終章にしようと考えていたほどである。本稿では、その主要な論点を明らかにしつつ、全訳を試みる。

There is a Latin letter from X to Descartes, July 1641. The sender is unknown, but this is considerably long and important, because it makes a close objection, from the viewpoint of Gassendism, against the Fifth Set of Replies of Descartes. At first, Descartes had an intention of adding this with his answer in the last chapter of the *Meditations*, but he failed. In this article, we try to translate it into Japanese with analysis and commentary.

キーワード：ガッサンディ、「第五答弁」、心身関係、永遠真理、生得観念
Gassendi, Fifth Set of Replies, mind-body relation, eternal truth, innate idea

はじめに

デカルトの往復書簡のなかには、宛名や差出人が特定できないが重要なものが幾つかある。ラテン語で書かれた本書簡もそうであって、「某氏からデカルトへ、パリ1641年7月」ということしか判明していない。それに対するデカルトの返信は「デカルトから某氏へ、エンデゲスト1641年8月」である。原テキストはそれぞれ、AT.III,397-412^{注1)} および AT.III,421-435にある。

某氏^{注2)}の詳細については不明だが、記述内容からしてパリの神学者と思われる。医療関係者であった可能性もある。本書簡のなかで「われらがパリの300人病院の盲人のうちには哲学者もいるが…かれらは質問に対して、色や光を思い浮かべることができないと

答えた」と言われているからである。名前を明かさないうちにデカルトは不満を漏らしているが^{注3)}、反論者が不詳であることは異例のことではない。重要なことは、某氏がデカルトの『省察』に批判的なガッサンディに与する人であったことである。この書簡の内容は、「第五反論」に対するデカルトの答弁を不服として、ガッサンディの立場から細かな点を再び反論するという形になっている。この点で、ガッサンディ自身による『抗弁』*Instantiae*.1642^{注4)}の先駆けをなすものである。

手紙のやりとりがあった1641年7月～8月は、『省察』第一版の印刷終了(8月28日)の直前である。当初、デカルトはこの反論を手直ししたうえで最後の

部分に組み入れるつもりで、大急ぎで答弁を作成した^{註5)}。だが、満足した結果を得ることができなかったようで、時間切れでその計画は成らなかった。まさに、まぼろしの「反論と答弁」と言われる所以である。第二版ではその余裕はあったにもかかわらず、これは採録されなかった。デカルトはガッサンディの反論を好ましく思っておらず^{註6)}、『省察』の仏訳版で「第五反論」を省いたほどである。その徒の反論などもはや採用するに及ばずと最終的に判断したのであろう。

本書簡は15ページに及ぶ長文であり、議論にも気合いが入っている。「第五反論」と「答弁」を踏まえた上での論であり、本気で論戦を交えようという意気込みがある。あるいは、神学をきちんと勉強していない新参者が伸してくるのを叩いておこう、という気持ちがあったかもしれない。しかし、なるほどと思わせる論点もあり、デカルトがそれに答えようとしたことは当然であったと思われる。答弁は翌月にまとめられ、14ページとこれまた長文である。しかし、内容的には「第五答弁」と同じく、真正面から答えたものではなく論点もずれたところがあり、やや期待外れの感が残る。これについては次の機会に考察する。

この反論の論点は全部で14ある。それらの要点を抜き出せば次のようになる。

1. 観想の真理と実生活の真理とを区別すべきではない。
2. 心身の相互関係は、精神と身体的痕跡との影響関係が特定できないなど、なお不透明である。
3. 思考の上で真であることが、実際にそうであるわけではない。たとえば、信仰の真理が幾何学の真理よりも明晰に認識されるわけではない。
4. ものを明晰判明に知っているかどうかの基準は人により異なる。
5. 「もの」とは何か、「思考」とは何かの意味が明確ではない。
6. 無限、精神の能力、独楽の運動、物体についての議論は不十分である。
7. ものや永遠真理は、神の協力に依存することなく存続し、破壊されない。
8. どんなものの原因にも無限進行はあり、世界は永遠の昔からつくられたと考えられる。
9. 神の観念が生得的であるという説には合理的な根拠がない。
10. 神の主要な目的は、すべてが神の栄光のために

なされることであり、それは容易に知られる。

11. 知性に照らされることになしに意志の決定はありえないが、知性ぬきに理解されることは虚偽であるか。
12. 生得観念説は、盲人には光や色についての認識がないことからしても、不合理である。
13. 神が「それ自身の存在である」とは何か。幾何学的なことがらは神を知っていても疑える。
14. 精神と身体との「結合」が不透明である。「人はけものに何もまさるところがない」という聖書の言葉をどう解するか。一方が他方なしに認識されるとき、それらは区別されるという点も不明確である。

このうち重要であると思われる論点を、少し整理しておこう。

(a) 真理の区別。この背景になっているのは次のデカルトの議論である。

実生活の活動と真理の探究との区別に気づかなければなりません。というのは、われわれの生活を処理することが問題である場合には、感覚に心をおかないということはもとより愚かしいことでしょうから。…だが、いったい何が最も確実に人間精神によって認識されるかが探究される場合には、その同じものを、疑わしいものとして、それどころかまた偽なるものとして、本気で拒否することを…欲しないということは全く理にもとることなのです（「第五答弁」AT.VII.350-351）。

実生活の行為の場面と、理論における認識の場面とを区別することで、デカルトは古代懐疑論のように誇張的な懐疑が日常生活にまで及ぶことを避けようとしている。これに対して、真理は理論と実践との次元に切り分けて済まされるものではない、という趣旨の反論である。一般的に言えば、書齋で思考することは実生活にもかかわることであり、思想と実生活との統一をどうするかという問題である。この反論に対して、デカルトはいわゆる暫定的道徳を以て答えるであろう。その「統一」は全哲学の完成後の話である。理論的な結論が出ていない段階では、最も真理に近いと思われるものに従って差し当たり行為するのである。たとえば、教会の壁が存在するかどうかは分からなくても、日常生活では壁があるとみなして教会へ行けばよい。目の前のパンが本当のパンかどうかを知らなくても、食べる必要があれば食べればよい。これと同じ反論で観念論では飯も食えないという議論があるが、そ

これは認識と行為との履き違えと言うものであろう。ただ、この段階ではその統一（知恵）としての哲学は、まだ完成にいたっていないとしなければならない。

(b) 心身関係。ガッサンディは次のように批判している。非延長的な基体であるあなたのうちに、延長的である物体の形象あるいは観念がどのようにして受け入れられようとあなたは考えるのか（「第五反論」AT.VI,337）。

のちにかれは「もし精神が延長をもたず非物的であるならば、それはいかにして身体に触れ、それを押し、動かすことができるか」（*Disquisitio Metaphysica*. 404.b）と、より鋭い問題提起をしている。この種の疑問はアルノーやエリザベトなどによっても提出されている。この反論では「痕跡」を手掛かりにして、相互関係があるなら精神は身体的な痕跡を持ち、身体は精神的な痕跡を持つはずだが、痕跡は身体的なものだからそれは不可能だ、としている。痕跡を介していかにして心身が相互に影響し合うのかが問題である。

これに対してデカルトは、痕跡は脳の小部分の運動から形成されるとするが、その痕跡と精神との関係については明確な答弁をしていない。影響関係のメカニズムは詳しくは分からないが、実際に精神は身体に結合され、痕跡に影響されているので、そのことを了解するだけでよい、と考えていたようである。だがこれは、心身問題を形而上学の次元で解決することを放棄し、「生と日常の交わりだけを用いることで」（エリザベト宛1643.6.28.AT.III,692）経験的に理解すべきことを示唆するものである。これによって心身問題が問題として解決されるわけでないことは明らかであろう。

(c) 明晰判明の判定基準。プロタゴラス主義をとるガッサンディは、人それぞれにおいて多様な意見があり「自分が支持する見解をそれぞれ明晰判明に把握している」と考える」と批判した（「第五反論」AT.VI, 278）。そして、われわれが明晰判明に把握しているつもりになっている度ごとに、われわれを正しく導いて、どの場合われわれが誤っており、どの場合そうでないかを教え知らせてくれる方法を提示することにこそ、あなたは腐心すべきであった（同279）

としている。これに答えてデカルトは、そのことは事細かく私によって然るべき箇所で達成されている、と私は主張します。すなわち、そこでは、私は最初にすべての偏見を取り除き、そのあとですべての主要な観念を枚挙し、明晰な観念を不明瞭な、もしくは不分明な観念から区別しました（「第

五答弁」AT.VII,361-362）

と述べている。だが、それは示されていないというのがこの反論である。神学者の立てる命題は、その人には明晰であっても他の宗教の命題と矛盾している、とも言われている。もっともだと思われる。実際、その方法ないし基準は必ずしも明らかではない。「第三省察」の「これらのことを頻繁に、注意深く考察すればするほど、私はそれをいよいよ明晰かつ判明に真であると認識する」（AT.VII,42）という文章が明晰判明の基準になっているとも読めるが、デカルトは「それは確実性の明晰で不可疑な指標ではない」（某氏宛AT.III,431）と否定している。

そもそも明晰判明の指標を求めるという話は、どういう性質の議論であろうか。それは、議論をもっと細かく詰めるということであろうか。実際、のちにライブニッツは、明晰判明の規則は「明晰さおよび判明さの指標が十分に示されないかぎり、ほとんど役に立たない」（GP.IV,328）と批判している。その趣旨は、明晰判明はもっと概念分析する余地があるということである。だが、かりに究極の指標が与えられたとしても、その指標のそのまた指標が必要になり、議論は無限に遡及するおそれがある。

デカルトは、真理はそれ自身で自明であり「超越論的に明らかな概念である」（メルセヌ宛1639.10.16. AT. II,597）という観点から、「明晰判明」以上の基準を求めることはしていない。たしかにデカルトは、明晰判明に認識されたものについて判断を違えることはない（某氏宛 AT.III,431）としつつも、「明晰に認識していると思っていたが、実は本当は認識していなかったものがあつた」（「第三省察」AT.VII,35）ことを認めている。たとえば、観念が外界からやってくるという認識である。これは自らの内に「明晰な認識」の指標があり、それに照らしてその命題を誤りであったと修正していることになろう。しかし、その指標は形式的な形では示せず、あくまで明晰であること自体がそれ自身の指標となっているのである^{注7)}。

それでは、この議論は万人を納得させる内的な指標をいかに客観的に示すかという話なのであろうか。しかし、その答えを見出すのは困難であると思われる。なぜなら、自分にとって明証的であるものを一般化することは、デカルトも自覚していたように^{注8)} 難しく、それは普遍的な真理になるどころか、独断的な真理になる危険性をつねにはらんでいるからである。この反論はそれを言い当てている。デカルトの「明晰判明」

の背景には、人間理性の普遍的な明証性や神の誠実という安全装置があるゆえに一応安定を保っているにせよ、それでも人によって明晰判明の解釈に温度差があることをこの反論は示している。より一般的に言えば、超越論的な安全装置に懐疑的なプロタゴラス主義との対決という問題がなお残されていると思われる。

(d) 永遠真理。デカルトは、神への依存なしにはものは存在しえないし真理も真理でありえないという立場であるが、これに対する異論は当時から多かった。とりわけ、神は数学的真理をも拒否できるとする考えは、反アリストテレス＝スコラであり、マルブランシュ、ライブニッツが異を唱え、側近のメルセンヌでさえも理解するのが困難であった。この反論は、永遠真理は神の協力なしにも保存され、破壊されないとしている。その理由は、永遠真理は不動のものであり、神が勝手に書き換えることはできない、神は矛盾したことをなしえない、ということであろう。これは当時の通説であった。

ところが、デカルトは神の全能を盾に、「神に何かができないと言ってはならない」(アルノー宛1648.7.29.AT.V,223-4)とする。神の自由を拘束するからである。そして、真理の根拠は神の全能に依存しており、神は $1+2$ が 3 でないようにできたし、山なしに谷をつくることもできた(同224)と言っている。これはこの時代の人には異様な説であっただろう。あえてそれを唱えたメリットは何であろうか。神の絶対的な自由を保障したい意図は理解できるが、そこにはなんらかの神学的な理由があるのか、それによって何を主張したいのか。絶対的真理なるものはなく、人間の立てる真理はみな相対的であるということをお願いしたいのか。それならば普通の懐疑論で十分である。しかも、ライブニッツも指摘したように^{註9)}、真理の基礎を神の意志に置くこの説は、真理はわれわれには隠されている神の意向次第でどうにでもなるというリスクを抱えることになる。にもかかわらず、デカルトのこの説に固執する。そのあたりが曖昧模糊としている。むしろ、神は矛盾をなしえないし、 $2+3=5$ を拒否できないとする伝統的な考え方のほうが、より自然だと思われる。

(e) 生得観念については、ガッサンディもそれに否定的であり、感覚や外的経験に由来する外来観念しか認めなかった。この反論のユニークな点は、生得説への反証例をあげ、神の生得観念を持たない幾何学者が存在し、また盲人は色の生得的な認識を持ってはいない

などとしている点である。生得観念の具体的な証拠を示せるかどうかが論点になろう。ここでデカルトの主張する「生得観念」の意味を考える必要がある。それは、「耳なし芳一」のようにすべての観念があらかじめびしりと書き込まれていることではない。デカルトは、ある観念がわれわれに生得的だというとき、私はそれがいつも顕在しているとは考えていない。もしそうなら、生得的なものは皆無になってしまうだろうから。そうではなくて、われわれが、われわれの内に観念を喚起する能力を持つということのみを考えている(「第三答弁」AT.VII,189)

と言う。つまり、その観念はつねに現前している必要はなく、可能態として精神に内在しているが、大切なことはそれをいつでも取りだせること、それを現実化できる素質を持っていることである。それゆえこれはJ. ロックの用語でいえば、素朴生得説ではなく素質生得説に相当する^{註10)}。ベタの生得説(素朴生得論)ではなく、能力としての生得論(ものを理解する能力があらかじめわれわれに備わっていること)である。それならば当然のこととしてだれしも認めるであろう。

それゆえ神の観念を持たない人がいても不思議ではない。神を何かの物的なイメージでとらえようとするからおかしくなるのであって、神という観念(思惟)は、適切な導きさえあればすぐに了解されるであろう。色の観念も同じであって、盲人でさえも色を理解する能力を生得的に持っている、というのがデカルトの主張である。現代のF. ジャックソンの思考実験^{註11)}で言えば、特殊なメガネをつけられ、モノクロの世界に育ったメアリーが成人してメガネを外したとしても、彼女はトマトの赤色のなんたるかを正確に理解できることになる。

これで一応の解答になるであろうが、問題がなくはない。ものを理解できる先天的な能力を持つというのが生得観念の意味なら、なんでも生得観念になってしまう恐れがないだろうか。ソクラテスにとって「小惑星探査機はやぶさ」の観念は生涯顕在化されなかったが、生得的であったことになろう。経験論者ロックも、そうした能力そのものの先天性は認めている。すると、生得論は「能力」を「観念」と言い変えているだけで、経験論と基本的に変わるところがなく、いったい何を主張しているのかということになろう。

某氏からデカルトへの書簡

パリ 1641年7月^{註12)}

拝啓、

あなたがこれまでなさった諸答弁を拝読した後でも、私はいくつかの反論をあちこち拾い集めることをやめることができませんでした。それゆえ、あなたは勇猛な競技者の力を試した後に、こんどは私の力を試してくださいませう。それも、あなたがその力が互角であると判断されるならばのことです。そして、あなたが輝かしい戦いの終わりを印象づけるなら、死すべき人間はみな不死の恩恵に浴するでしょう。というのも、あなたは人間たちに、不死とは全力でそれを追求するものだという事を知らせることになるうからです。そこで、まだ残っていると私に思われる反論は以下のとおりです。

第一に、最も鋭敏なる哲学者P. ガッサンディに対する答弁の498ページ^{註13)}で、[同じソリ版の]他の多くの個所においてと同様に、観想において追求している真理を実生活において探求すべきではない、とあなたがあえて主張していることに、私は少なからず驚きます。それでは正しく生きる必要はないのでしょうか。真理の規範によらずに行為を導くならば、あなたはいかにして正しくかつ健全に生きるのでしょうか。それともキリスト者の道徳には真理が欠けているとすべきなのでしょうか。もとよりキリスト者の生は、自分および自分の行為のすべてがつねに神の栄光に関与しているならば最善であると判断されます。そのことは、われわれが明晰かつ判明に認識するものと同じほどに真であるのではないのでしょうか。どのような行為であれ、それが神の不興を買いだらうと思われるときには、つねにそれを控えるべきではないのでしょうか。控えるべきだと明晰には知らなかった場合を除いて、何かを控えるよう強いられるのではないのでしょうか。そして、行為の場面においては、神が要求していると明晰に思われることについては、つねにそれをやってみるべきではないのでしょうか。実際、他の理由によってそう強いられているとだれが言うのでしょうか。そして、こうした明晰さなくして行動したりあるいは控えたりするよう強えられることはないのですから、なぜあなたは行為においては、学問におけるよりも真理性の劣るものを想定あるいは仮定するのでしょうか。というのも、キリスト者ならば行為においてよりもむしろ、形而上学や幾何学においてさまようことを選ぶは

ずだからです。

たしかにあなたが言うように、だれかが行為すべき生において、形而上学におけるように、物体やその他のものを疑おうと欲するなら、ほとんど何もなされないでしょう。— 罪を犯さないのであれば何もなされないとすることは、たいした問題ではありません。しかし、たとえばあなたが見ていると思っている教会の壁が本当の壁かどうか、あるいはむしろ、夢でいつもそうであるように何も存在しないのかどうかを疑うことができることを理由に、あなたは日曜日のミサを聴くのをやめるでしょうか。しかし、あなたが壁かどうか、本当の教会かどうかを、根拠をもって疑っている間は、教会に入る必要はありません。それはちょうど、あなたがいかに目覚めていても、目の前にあるパンが本当にパンであることをあなたは知らず、眠っているのではないかと疑っているなら、貪り食う必要がないようなものです。— しかし、あなたはそれを待つ間に憔悴し飢え死にすると言うでしょう。しかし、それによって私の生命を養っているものが私に明晰かつ明白に立ち現れるのでなければ、私はそれを貪り食う必要はありません。明晰に知られる食物が私に欠けているなら、私はそれをあたかも生贄のように神に捧げることができ、捧げるべきでしょう。もし私が本当に行為していることを明晰に認識しておらず、そして私がかかっているものについて、それが真の対象として私に現れていることを明晰に認識していないなら、私は行為することを強いられません。それゆえ、あなたは二種類の真理を立てるべきではありませんでした。かつてだれがそのようなことを聞いたのか、あるいは考えたのか、とは言わないでいただきたい。なぜなら、あなたが私と一緒に先入見によって[実際に]行為をしながら、[理論では]私に先入見から自由になるようあなたが欲したことは不当であるからです。また、それはなされえないし、なされるべきでないことをあなたが証明してくれないかぎり、あなたの意志あるいはすべての反対者の意志に反して、私が生の行為においてさえも[先入見を]拒否することを望むのも、ここでは不当であるからです。

第二は、103ページ^{註14)}であなたが「子供の精神は大人のそれほど完全にはたらかないことから、精神がより不完全であることは帰結しない」と言うとき、それがより不完全でないということもまた帰結しません。胎児の精神は何も考えないと言われるとき、あなたが実際それを否定するにせよ、あなたには否定する

いかなる根拠も実験もありません。それと同じように、脳には思考のいかなる痕跡も残らないのでわれわれはそれを思い出さないにせよ、精神はどこにあってもつねに考えているとあなたは信じるという、このことをただ主張しているのみです。魂あるいは精神の非身体的なはたらきが、いったい身体に何かその痕跡を刻印することができるのでしょうか。というのは、痕跡は身体である脳のなかにあり、いかなるものも、それを受け入れるものの仕方に応じて受け取られますから、それはまったく物的でなければならぬと思われるからです。しかし、精神が身体的な痕跡を持つことは、身体が非身体的な痕跡を持つのに劣らず「不可能」です。次に、脳の身体的な痕跡が、いかにしてわれわれが非身体的な思考を持つように仕向けるのでしょうか。精神はいかにしてその身体的な痕跡を観想することができるのでしょうか^{註15}。あなたがそう信じているようにいかなる像もなしに、あるいは霊的な形相さえもなしに、それ自身によって観察するのでしょうか。しかし、いかなる形相もなしに観想するというこの仕方を、神学者たちはただ神のみに認めています。あなたは、精神は非身体的な形相を使っていると言うかも知れません。しかし、どういう原因からその形相は産出されるのでしょうか。身体的であると考えられている脳の痕跡からではありません。精神だけからでもありません。さもなければなぜ痕跡が必要なのでしょう。かくして、自説を守るためにあなたは大変な困難に身を投げ込むことになるのがお分かりでしょう。

第三に、108ページ^{註16}であなたが「何かが私に属すること、私の認識に属することとは別のことである」と言うとき、あなたは、あなたの形而上学が認識に属するもの以外の何ものをもまったく立てていないことを承認しているように見えます。かくして、あなたが観想していると想定あるいは信じている何かが、本当に事物のうちにあるかどうかを、われわれは依然として疑っているのです。かくして、あなたの精神は非身体的でないか、あるいは少なくとも非身体的であることが確かではないかは、むしろあなたの思考のうちだけで真であることになるでしょう。なぜなら、事物が実際にあなたが考えているようにあることは帰結せず、むしろ、事物が真であるのは、単にあなたが事物そのものについてそう思考することから、あるいはあなたの精神によってある事物を真であると想定するところからであるからです^{註17}。そこで私は、あなたは「知る」と言うべきときに、なぜ「信じる」というこ

とばをしばしば使ったのかを知りたく思います。なぜなら、われわれが単に「信じている」ことを「知る」のは、おそらく、信じるように提出されたものについてそれが明晰に真であるとするのでなければ何も信じるべきではない、とあなたが欲するときにかぎるからです。そのことをあなたは「第二反論への答弁」^{註18}で述べているとっておられます。この点で、あなたが、神の恩寵によって与えられたあるものにおいては、幾何学もしくはそれに類似したものと同等あるいはときにはそれ以上の明晰ささえあり、したがって信仰の真理性はより明晰に認識されると認めておられることに、みな驚いております。しかし、一体だれがそういうことをみずから経験したのでしょうか。たとえば、三位一体の秘儀の真理はより明晰に認識される、あるいは、それはある人においては、ユダヤ人やアリウス派^{註19}においてはその反対が明晰であると思われることよりも、より明晰に認識される、とあなたは信じておられるのでしょうか。

さらに、その真理をあまりはっきり見届けずに「虚偽の意見のために死をも辞さない」^{註20}とあなたが言う人たちについて、おたずねしたいと思います。かれらは、真なる意見のために死へと赴くが、しかし虚偽の意見を持つ人たちに劣らずその真理を見届けていない他の人たちよりも、悪条件の下にあるとあなたはお考えでしょうか。というのも、あなたは最初、実生活を律するには蓋然性で十分であると言い、どちらも蓋然性を持っていると信じておられるのですから、なぜ死とその価値とが違ってくるのでしょうか。しかしそれは不合理だと思われまます。さもなければ、殉教においてはどんな異端者も正統派と差異がないことになるでしょう。もしあなたが神学者でないということでその返答を拒否されるなら、私は次のように反論します。あなたはキリスト教徒であり、しかもご自分でそう思っておられるように正統派なのであり、正統派においては自分の信仰をいつでも釈明できるよう聖書が命じています。とりわけあなたの答弁においてそれについて話す機会をあなたは与えたのですから、と。

第四に、530ページ^{註21}の終わりに関して、あなたが「あるものを明晰に認知しているかどうかを知ることができる方法を十分にこと細かく与えた」とは思いません。実際、あなたの確実性の最高の点は、われわれがあるものについて考えれば考えるほど、それをますます真であると判断するほどに明晰に認知する、と思っているときにあります。たとえば、「同じものか

ら同じものが差し引かれても同じものがなお残る」、およびあなたの言う「人間精神は非物的である」という公理について考えるときのように、です。ところで、トルコ人やソツィーニ派^{註22)}にとっては、御言すなわち神の子が父なる神からすべてを与えられているが、神に依存せず、神から受け取った自らの本質や本性に感謝する必要はないということは、同じように明晰に矛盾しているように見えます。また[三位一体における]三つのペルソナはあるが、三つの本質、つまり三つの事物、つまり三つの存在者はないということも矛盾です。カルヴィン主義者にとって、キリストの身体は二つあるいは多くの場所にあるが、しかしそれが聖体の秘蹟から帰結するというのも同じく明晰に矛盾していると見えます。理神論者においても、神の最高の善性が人間に永遠の責苦の苦しみを与えていることは同様に明晰に矛盾します。そして、あなたが矛盾していると思うどころか最も真であると信じているこの種の多くのもの[がそう]です。あなたは言うでしょう、かれらはそれが矛盾を含んでいることを明晰判明に認知していないのだ、と。しかし、かれらはそれを認知していると信じ、幾何学や形而上学においてはこれ以上に明晰なものはないと主張します。それでは、自分で証明を持っていると言う人たちに対して、あなたがたは真なる証明をけって持っていることを私は明晰に証明するだろう、と回答できるかどうか試してみたいかがでしょうか。

第五に、515ページ^{註23)}であなたは「あなたが考えるものであることを認知するためには、ものとはなんであるかを理解しなければならない」ということを否定しているように思われます。それは、主語も述語も理解せずに命題を理解するということになりえないでしょうか。しかし、あなたは「もの」とは、「存在すること」とは、「思考」とは何であるかを知りません。もしご存じなら、それが何であるかを、その命題の真理性が明晰に認知されるほどに明晰に、私に教えていただきましたものです。これに加えて、あなた自身が考えているのか、それともプラトン主義者たちがそう望むように、あなたのなかにある世界靈魂が考えているのかをあなたは知りません。しかし、考えているのがあなただとして、私が100回たずねてあなたが100回答えるとしても、あなたが考えているのは物的事物にほかならず、精神および思考は、事物の大きさあるいは個々の部分と一つになり、適合し調和するのです。それゆえ、思考の部分が対象の一部分と調和し、また他

の部分が他の部分と調和するためには、精神および思考が物的事物の流儀でしかし自分流に広がる必要があることが、あなたにはお分かりでしょう。それはちょうど、眼においては、個々の部分が個々の対象の部分に対応しているようなものです。

第六に、518ページ^{註24)}であなたは「無限なものが境界の否定によってわれわれに理解されることはない」と間違っ言っています。なぜなら、限界は無限の否定を含んでいますので、それゆえ限界の否定は無限の認識を含んでいるからです。というのは、反対のものの原因は反対のものだからです。

522ページ^{註25)}で、あなた自身「真のまったく無限なものの観念を持つためには、それがいかなる限界によっても囲まれていないことが理解されればそれで十分である」と告白しています。それゆえ、あなたが否定したその推論こそが最善のものです。すなわち、このものはいかなる限界ももたないがゆえに無限であるのです。したがって、あなた自身はまったく矛盾していると思われま。

525ページ^{註26)}で、あなたは「事物を増大させる精神の能力は神によってわれわれのうちに置かれた」と言っていますが、しかしあなたはそれを証明していませんし、どこでも証明しませんでした。というのも、それは永遠で独立した実体である精神自身によるのではないのでしょうか。なぜなら、私の精神は他のものに依存してはいないと私が見ている以上に明晰に、あなたの精神はそれに依存しているとあなたが見ているわけではないからです。というのも、精神がそれ自身においてあることつまり他のものに依存しないことから、それがあらゆる種類の完全性を持つべきであることは帰結しないからです。実際、精神がそうした本性を持つためには、なんであれ提出された有限な対象を思考によって増大することができれば十分なのです。そして、アトムや第一物体はそれ自身においてあると信じるきわめて精緻な哲学者にはこと欠きません。かれらがそれを十分明晰に見ていないなら、それらが他のものに依存していることもまた明晰に見ることはできません。もっとも、あなたがもっと輝かしい光によってかれらに取り消しを要求すれば話は別であり、あなたは大いに感謝されることでしよう。

520ページ^{註27)}で、あなたは「独楽は自分で回りながら自分自身を動かす」と言っています。しかし、それは動くのではなく、ムチによって動かされているのであり、ムチがなくても明らかにその一撃が独楽を回る

ように強いるのです。それゆえ、独楽は動くよりも動かされているのです。ちょうど空中に投げられた石や、野戦砲から発射された砲弾のように。

最後に、あなたは少しあとで^{注28)}、物的事物の観念は知性あるいは人間精神に由来する、と主張しています。あなたは夢においてそうであると他の個所で言っていると思われるように、です。そうだとするならば、かりに神が欺瞞者ではないとしても、われわれは事物の本性のうちに、何か物的なものがあるかどうかを知りえないことになるでしょう。というのも、精神が一度ある物的な事物の観念を自分自身からとり出すのなら、つねにとり出すはずだからです。それに加えて、物的な事物は、精神がそれについて持つ観念よりもより高貴であるわけではなく、精神は物体を優越的に含んでいるので、そこから、すべての物体およびこの可視的な世界のすべても、人間精神によって産出されることが帰結します。あなたの説は、われわれをこんな所にまで導くことがお分かりになるでしょう。というのも、原因は、それが優越的に含むすべてのものを産出するからです。そして、それは、神がこの世界を創造しえたとわれわれが信じている理由でもあるからです。

第七に、524ページ^{注29)}の論点9で、光は太陽なしに維持されないように、あなたは「あるものは神の連続的なはたらきかけなしにその存在において保存される」ことを否定しています。私の言いたいのは、まず、太陽の光は太陽がなくてもボローニヤの石^{注30)}によって、閉め切った部屋において保存されることです。これは私がしばしば経験したことです。それゆえ、どんなものでも神の協力なしに保存されえます。次に、たとえ神がその協力をやめるとしても、われわれの精神あるいはたとえ太陽は消えうせるのでしょうか、それともむしろまだ存続するのでしょうか。その実体を破壊するのは結局だれなのでしょう。たしかに、無からは何も生じず、またあるものが自分自身で無に帰することもありえないので、どのような存在者であれ、それを極力忌み嫌い、回避するのです。もしあなたが被造物は神の協力にほかならないと言うなら、被造物はちょうど場所的運動のように実体ではなく偶有性であることになりませんが、だれもそのようなことは言わないでしょう。それは実体であるがゆえに存続することができます。この点で神はきわめて驚くべきことに、ものを神の協力を要しないように強く作ることができたのです。あなたが反対のことを言うとき、

あなたは神からその力と善性とを取り去るのです。

あなたはその他に、神がただその協力をやめるだけとは別の仕方では被造物を破壊するとするならば神は非存在へと向かうであろう、と反論していますが、そこであなたはご自分が用意した陥穽に陥っています。というのは、神が非存在に向かうのは、神の協力が停止したときではないのでしょうか。そのとき神は被造物を破壊するのですから。しかし、ものが神に依存しているためには、どのような仕方でも神によって破壊されるにせよ、なんであれそれが神によって破壊されることで十分です。神は一度つくったものを破壊することは決してありませんから、どういう仕方でも破壊するかを考える労はたしかに要らないでしょう。それはちょうど、すぐあとで言うように、三角形と同様に永遠な存在者の本性など神によって産出されたあなたとあなたが考えるものを、神は破壊しないようなものです。しかし私は、神は幾何学や形而上学の事物がそのような、永遠で不動の事物の本性を破壊することはできない、と主張します。しかしながらあなたによれば、それらの生成と保存は神に依存しているのです。ところで、私はそれらが破壊されえないことを証明しましょう。神はできることをすべてなすにせよ、(万一)三角形を考えることができなかつたと想定します。しかし、あなたはやはり今あるような事物の本性のうちにありと想定するならば、三角形の三つの角は二直角に等しいことは真である、と告白しないのでしょうか。神は、同じものから同じものを取り去ると残りは等しくないようにすることができるのでしょうか。結局、こうしたことが今は真ではないようにするためには、神は何をなすべきであり、あるいは永遠の昔から何をなすべきであったのでしょうか。同じものが同時にありかつあらぬことが真であるようにするためには、神は何をすることができたのでしょうか。そして、あなたが538ページ^{注31)}で認めておられるように、[あなたによれば] こうした真理はそれ自身、あなたの精神または身体に劣らず神に依存しています。それゆえ、もしそれらの真理が神の協力を必要とせず、不動であり、破壊されえないのであれば、あなた [の推論] はなんと堅固でゆるぎないものでしょう。しかし、[あなたの言うように] もしそれが神に依存するとするならば、どういう原因の種類においてなのかを教えていただければ幸いです。

第八に、同じ論点9で^{注32)}、あなたは「下位の原因における無限進行」を否定していますが、それには根

拠がありません。神は、どんな結果でも無限に多くの原因に依存するようにすべてを整えることができたからです。実際、神はいかに小さな粒子にも無限の諸部分があるようにしなかったのでしょうか。なぜ神は無限に多くの原因を立てることができなかったのでしょうか。その結果、神はただ一つの原因によってすべてを表現できなかったで、数である程度その償いをするようになります。しかし、互いに結合した原因の進行に対する反証はなんらありません。もし、反証があるとすると、それは主として、それがたどらなければならない無限に多くの原因からは、いかなる結果も出て来ないことによります。しかし、すでにそれぞれの結果と、先行する無限の時間が想定しているように、それらが無限の時間においてたどられることは不合理なことではありません。それは、世界が永遠の昔からあると信じたアリストテレスによって否定されるべきでもありません。というのも、世界がつくられたのと同じ永遠の一瞬において生成がなされ、あるいは炎がクズや乾ききった灯心のほこりを燃やすことができたからではないのでしょうか。もしあなたが、他の古代の哲学者たちと共に世界が永遠にそのままであると想定するならば、それは永遠の昔からつくられたのと同じことになりませんか。世界が永遠の昔からつくられたことについては、多くの著名な神学者は可能であると判断しています。ところで、現実に可能であることが想定されるのですから、そこから不合理なことは何も帰結しません。

第九に、あなたは「すべての人が神の観念を自分で認識するわけではない」^{注33)}ということに驚いているように思われます。しかし私は反論いたします。ここには少なからぬ幾何学者や神学者がおり、かれらは精神を物的な事物からできるかぎり引き離したあとでもなお、いかなる生得的な神の観念も自分のうちには認められなかったと認め、また、かれらはあなたの『省察』を10回読んだあとでもなお、神の観念が自分のうちに将来発見されることを期待してない、と。そこからかれらは、あなたが天使的な精神をおもちなのか、それとも、あなたがだまされていて実際には持っていない観念を享受していると信じているのか、どちらかだと推測しています。そしてかれらは、その観念が将来もずっとあなたのうちに発見されるであろうというほどに確信をおもちかどうか、あなたに要請しています。なぜなら、より強力な説に染まると、20年後には神の観念およびすべての物体から区別された精神の観

念において、あなたは実際にだまされていたと知ることがありえるからです。その結果、あなたは次のように言うことになるでしょう。最初はそのらの観念を明晰判明に認識していると信じていたが、しかしその後、同一平面にある互いに接近する二直線は結局いつかは出会わざるをえないということを明晰に見ているつもりであった人がだまされたのと同じ仕方で、だまされていたことが明らかになった、と。というのもあなたは、より頻繁に考察すればするほどより確実に思われるものは明晰で疑いえないものとすべきだと言い、かつ「つねに」とまでつけ加えてはいますが、しかしその「つねに」は永遠を意味することができ、しかし、あなたは永遠を経験したことはなくまた経験できないので、その観念がつねに真なるものとしてあなたに現れるであろうことはないからです。しかし、少なくともあなたは、次のようにと告白せざるをえないのではないのでしょうか。われわれの側からは何もかも真であると言うことはできず、ただわれわれがそれを真であると信じているかぎりでのみそう言うのだ。そして未来についてはわれわれは不確かであるので、精神に現前しているものでないかぎり、何もわれわれによって真であるとは肯定されえないし、これからもそのようにわれわれに見えるであろうとは予言することはできない。その結果、われわれは何も絶対的には真であると肯定すべきではない、と。

第10に、531ページ^{注34)}で、あなたは「神の目的は、われわれによって他の原因と同じく容易に知られることができる」ということを否定しています。しかし、神の目的はすべてのものが神の栄光のためになされることであることは、神自身が意志を持っていることと同じく明らかです。そして、神は、他の個別的な目的を自らに定めることができたにもかかわらず、神を観想し崇敬するために人間の精神をつくったことは、われわれを照らすために太陽をつくったことなどと同じく、疑いありません。それゆえ、あなたのお考えとは反対に、神の目的は、少なくともその主要な目的は、他の原因よりも知るののはるかに容易であることは明らかです。

第11に、535ページ^{注35)}で、あなたは「意志の決定について」多くのことを論じていますが、しかしそれは、知性が意志に光明を与えないかぎりありえないと私は主張します。なぜなら、もし意志が、知性があらかじめ示さなかった何かを決定するならば、意志は知性なくしてそれを見る、つまり知性なしに知性認識すること

になり、その結果、意志自身が知性になりますが、これは不合理だからです。そして私は、意志は知性によって少しも提起されていないことに自らを決定するよりも、むしろあなたが言うておられることに、すなわち「意志は知性がたまたま提起することに向かう」に同意するでしょう。同じ箇所、あなたは「虚偽は知性によって真理の相の下には理解されない」と言っています。それゆえ、われわれのうちには神の観念は与えられていないということは虚偽になるのでしょうか。しかしながら、われわれの幾何学者は神の観念が与えられていないことを真理として理解し、信じ、主張しています。それゆえ、あなたの主張とは反対に、かれらは虚偽を真理の相の下に理解しているのでしょうか。

第12に、あなたがどこかで、「子供は三角形を見る以前にその観念を自らのもに持っていた」^{註36)}と言っていることは不思議に思われます。それゆえアリストテレスは、魂はそこに何も書かれていない白紙のようであると主張したとき、間違っただけです。かれは、あらかじめ感覚のうちになかったものは知性のうちにあると信じていました。そしてかれと共に、多くの哲学者や神学者も同じく間違いました。なぜなら、かれらは同じことを信じこみ、自ら証明していると判断したからです。いったい、生まれつき盲目である人のだれが光や色について何かを認識するのか、言っていたきたい。たしかにだれもいないでしょう。その証拠に、われらがパリの300人病院^{註37)}の盲人は、そのなかには哲学者もいますが、質問に対して、色や光を思い浮かべることができないと答えました。私が盲人に光の本質や色の本性を説明したとしても、です。そして、かれの精神がそれについて考えたときに、なぜ脳が色についての思考の痕跡を受け取るようになるのか、たしかに私には分かりません。もっとも、その欠陥が脳にあるのか、それとも精神そのものにあるのか私にははっきりしないので、私はあえて何も主張しませんが、しかし、それはあなたにもまたはっきりしていませんので、今やあなたはせいぜい私と同等です。しかし、私がまさっていると主張したいのは、目が見えなくなっても光は容易に見えることです。実際、精神は不可分であって、増えたり減ったりすることはできないのですから、かれの精神には何も付け加わっていません。しかしあなたは、母の胎内においてさえも三角形、神、そして自分自身の観念あるいは認識を持っていた、とあえて確信しておられます。しかし私

はお尋ねします、眠っているとき、まどろんでいる感覚が精神の純粋な自由を呼び戻していると思われるときに、なぜ精神はアルキメデスの証明やそれに類似したものを作り上げないのでしょうか、と。

私は507ページ^{註38)}で、あなたが「精神がその後忘れてしまうのは、脳の痕跡を残さなかったからである」ということを肯定していることを覚えています。しかし、眠っているときに、なぜ脳は先に考えたことの痕跡を受け取り、保持するように、もっとうまく仕向けられないのでしょうか。たしかに、もし人間精神が、身体や器官と共にあるよりもそれらを使わない方がより洞察力にすぐれるとするなら、身体から生じてくる精神の間違いが、なぜ神自身に転嫁されないのかが分かりません。こうしたことは哲学者の共通の意見においては少しも生じません。かれらは、魂は身体の器官を通してでなければ何も知ったり、学んだりすることができない、すなわち、あらかじめ感覚のうちになかったものは、何も知性のうちにはありえない、と言うのです。

第13に、542ページ^{註39)}であなたは「神の本性は、三角形の場合とはちがって、その存在なしには考えることができない。なぜなら、神はそれ自身の存在であるから」と言っています。それ自身の存在とはなんなのでしょうか。それでは三角形は異種の存在であってそれ自身の存在ではないのでしょうか。

次に543ページ^{註40)}で、あなたは、懐疑論者たちが神を然るべく知るなら、幾何学的なことがらの真理を疑うことができない、としています。しかしこれとは反対に、あなた自身はかれらと同じくそれらを疑う同じ理由をおもちであり、また、かれらはあなたと同じように総合的にも分析的にも、エウクレイデスやその他の幾何学者において公にされたすべてのことを証明しています（かれらもすぐには準備ができていない、どういう手段をあなたは使うことができるでしょうか）。しかしながら、かれらは疑い、それゆえあなたも、神を知っていると思っただけでも、それを疑います。あなたは、最もすぐれた哲学者と共に、線が点から成るかどうか、有限あるいは無限な部分から成るかどうかを疑わないでしょうか。もしあなたが、それを無限であると想定するなら、あなたはなんとという深淵にとらわれるかをご覧ください。あなたは、一歩が一里と同じであり、一滴の水が大洋と同じであると告白しなければならぬほどなのです。もし有限であるとするなら、コンコイド曲線は、それに向かって曲がる直線にまもなく接触するほどになるのをご覧ください。もし

あなたが、点から成ると言うなら、エウクレイデスの第10巻^{注41)}および通約不能とされるすべてのものが、いかに崩壊するかをご覧ください。もし点から成らないとするなら、平面上を動かされた同じ点の写像や、それ自身が線を生じるさまざまな接点がいかにしてなくなるかをご覧ください。それゆえあなたは神を知っていても、あなたは幾何学的な事物を疑わないでしょうか。もしあなたが、直角三角形の斜辺は潜在的に他の二辺に等しいことをいつも明晰に見ていると答えるなら、同じことを懐疑論者は答えることができたでしょう。もっとも、かれは神を知らないのです、あなたと共に次のように言うでしょう。「このなんらかの悪い霊が力のかぎり私を欺くがよい。だが、かれは、私がそれを証明しあるいはそれを考えている間は、私が存在していることと同じく私には明晰であるところのこの命題において、私が欺かれるようにすることは決してできない」^{注42)}と。

第14に、548ページ^{注43)}で、あなたは、精神が延長を持った身体と結合していたとしても「精神は延長である」ということを否定しています。精神は全身と結合しているが、しかし、精神のある部分が身体のある部分に結合し他の部分が身体の他の部分に結合しているというわけではないということが、どうしてありえるのでしょうか。そして精神は知性では認識できないので、あたかも球が平面に接するように、精神はただ一点で身体と接しているとあなたは言いたいのではないのでしょうか。あなたは、全世界と延長を共にする神についても同じことをお考えではないでしょうか。私にはほとんど説明できませんので、その様子を精神で把握できるようにご説明いただければ、たいへんありがたく思います。そして、「伝道の書」が第3章で言う「人はけものに何もまさるところがない」をどう理解すべきかを加えていただければと思います。「何も」と言われているもののうちには、人間の部分である精神自身も含まれています。それゆえ、もしけものの魂が死に服するなら、精神も死すべきであるとあなたは認めねばなりません。というのも、もし「伝道の書」はただ身体について語っているだけであるとあなたが言われるなら、あなたはどうやってそれを証明されますか。私は明晰な認識についてだけつけ加えます。すなわち、われわれが他のものなしにどちらも完全に認識するとき、それらは区別されるとあなたが言うように、われわれは一つのを他のものなしには概念できない間、二つのものは互いに区別されないといつも

判断すべきでしょうか。なぜなら、この認識の仕方は、精神のはたらきによって事物相互の真なる区別を判断すべきであるということよりも、むしろわれわれの精神の無力を証明しているのではないのでしょうか。なぜなら、私は父なしに息子を概念することはできないとはいえ、しかし父と息子とは区別されるからです。そして、私が人間の本质あるいは三角形をそれらの存在なしに概念するとき、しかし、偉大な哲学者たちが教えているように、人間の本质は熟慮された最高の論拠によるのでなければ、その存在から区別されません。

以上が、あなたを攻撃する人の最終弾として、あなたがお答えになるべく残されていることです。というのも、この世に新しい「スーパー戦士」が出て来ないかぎり、今後だれかがあなたが正当に拒否できないような反論をすべきとは思わないからです

注

- 1) 引用は *Oeuvres de Descartes*, publiées par Ch. Adam & P. Tannery, 12 tomes, J.Vrin, Paris. (1996) による。その巻数とページ数をこのように記す。
- 2) 某氏は自らを *Hyperaspistes* (スーパー戦士) と呼び (AT.III,412), デカルトもそれを踏襲している (メルセンヌ宛1641.7.22.AT.III,417)。クレルスリエは単に「反論者」と訳している。レヴィスは「予備役」の意としている (*Descartes, Correspondance avec Arnauld et Morus*, Introduction et notes par G. Lewis, Paris, (1953) p.5)。
- 3) メルセンヌ宛1641.7.22.AT.III,417
- 4) のちにデカルトは「抗弁」の抜粋を読み、1646年クレルスリエに宛ててその所感を述べている。それは「第五反論について」として『省察』の仏訳版1647年に組み入れられている。
- 5) 「あなたの紹介による某氏の反論を読みましたが、それにはまったく喜んでお答えします。しかし、私の答弁は印刷されることになっており、また読者の関心を考慮しなければなりませんので (読者は繰り返しや主題からの脱線にはうんざりするでしょう)、私の方であらかじめその反論の手直しをさせていただきますよう、どうぞお願いいたします。その目的は、私が他の個所ですでに答えたことや、第八項目やその他のように、私とは正反対の意味にとられている箇所を削除するためです。あるいは少なくとも、これらのことがらを削除すべきでない

- かれが思うなら、読者への弁解になるように、かれの名前を印刷することをお許しいただきたい。」(メルセヌ宛1641.7.22.AT.III,417)
- 6) もっとも、最近発見されたメルセヌ宛の書簡1641.5.27によれば、デカルトは当初は著名なガッサンディからの反論を歓迎し、喜んで答えようとしていた。(山田弘明「新発見のデカルト書簡」『中部哲学会紀要』第43号(2011))
- 7) スピノザはこの見方をしている。「明晰なものはそれ自身で明らかであり、それがどうして明晰と分かるかと問うことはナンセンスである。それをさらに明晰にするいかなる明晰性もありえないからである。したがって、真理はそれ自身と同時に虚偽を顕示する。真理は真理によって、すなわちそれ自身によって明晰となる。」(『短論文』II.15)。昔プロ野球でアウトかセーフかの判定でもめたとき、監督が審判にルールブックを見せろと抗議したのに対して、審判は「俺がルールブック」だと言って拒否したという有名な話がある。これは、次元は違うが同じ事態を指していると思われる。
- 8) 「そう考える習慣によって、私にとって身近で明証的となった概念は、だれにとってもそうであると私は思い込んでいた」(ヴァチエ宛1638.2.22.AT. I,560)。
- 9) 『形而上学叙説』2
- 10) 拙著『デカルト『省察』の研究』創文社 pp.198-202参照
- 11) Frank Jackson, Epiphenomenal Qualia, in *The Philosophical Quarterly* 32. (1982) 信原幸弘『心の現代哲学』勁草書房(1999)
- 12) 以下、全訳を試み脚注をつけることとする。これは本邦初訳である。テキストは基本的にAT版によるが、レヴィス版(本稿、注2参照)およびイタリア語版 *René Descartes, Tutte le lettere 1619-1650*, a cura di G. Belgioioso, Milano. (2005) を参照した。
- 13) 「第五答弁」AT.VII,350-351
- 14) 同354
- 15) 「精神が身体に結合されているかぎりにおいて、精神が持っていた思惟を想起するためには、それらの或る種の痕跡が脳に刻印されていることが要求され、それに自らを振り向ける、あるいは注意を向けることによって、それらは想起される。」同357
- 16) 同357
- 17) 私の思考 (cogitatio) においてそうと認識されたものが、なぜ事物 (res) においてもそうであるか。このことは、明晰判明な認知と神の誠実を背景として証明されることになる(『省察』「読者への序言」AT.VII,8)。
- 18) 同147-148
- 19) キリストが神の子であるとするアタナシウスの三位一体説を批判する説で、325年ニケーア宗教会議で異端とされた。
- 20) 同361
- 21) 同379
- 22) 16世紀イタリアの Fausto Socini が唱えたもので、三位一体説に反対する主張。
- 23) 同362
- 24) 同365
- 25) 同368
- 26) 同370-371
- 27) 同367
- 28) 同367
- 29) 同370
- 30) 燐光を発する石。1603年イタリアのポローニャで靴屋で錬金術師の Vincenzo Casciarolo が採掘した。
- 31) 同380
- 32) 同380
- 33) 同374
- 34) 同375
- 35) 同378
- 36) 同382
- 37) Hospice des Quinze-Vingts パリのフォブール・サントノレにあった盲人のための救貧医療施設。
- 38) 同357
- 39) 同383
- 40) 同410
- 41) そこでは、通約できる量とできない量とが、それぞれ有理数(有理面積)、無理数(無理面積)として論じられている。
- 42) これは引用ではないが、「第二省察」AT.VII,25に対応している。
- 43) 「第五答弁」VII,388。